○古城氏

古城でございます。どうぞ、よろしくお願いします。

永井さんの方から、話していただきたい内容についていろいろご指定があったんですが、私の今日の話は、この要望通りになっておりません。この後、川口市調査の経緯というところでお話しいたしますけれども、最初の『鋳物の町』の調査以来、私の先輩からわれわれにつながっている一貫した関心というのがありますので、それに沿ってお話しした方が有益ではないかと思いまして、内容を要望からちょっと変えさせていただいてお話ししたいと思います。

早速、レジュメの「１．はじめに－川口市調査の経緯」というところに入りますけれども、既に『川口市史』のこの『通史』５２７ページから８ページにかけて載っておりますが、尾高邦雄教授、当時の東大・文学部社会学科の主任教授であったわけですが、この尾高先生のもとで、ここに現物ございますけれども、『鋳物の町』というタイトルでの研究調査が行われて、その結果が、有斐閣だったと思いますが、そこから出版されているわけです。これが第１刷りのもので、私もこのときはまだ学生にもなっていませんから、後に古本屋で買ったものですけれども、この調査が行われたのが１９４７年から５０年で、６年後に出版されたという代物です。それを『川口市史』の方には、その内容についてかなり要約して書いてありますけれども、大事な点が一つ抜けています。それはこの川口市調査で何をしようとしたのかというところが必ずしも明確ではないということです。その目的というのが、そこに書いておきましたように、中小企業における日本的なものの特質の探求ということで、これが尾高先生が執筆した「序」の中に書かれているわけです。で、ここに視点を置いて、その日本的なるものの位置づけの変化ということを考えるという形で、今日はお話をさせていただこうかと思っております。

ちょっと回り道いたしますけれども、尾高教授はアメリカからアメリカ流の産業社会学を日本に導入することを主な仕事としてやられた方ですので、日本的なものの特質というのは、尾高先生にとってはそのアメリカの産業社会学を日本に適用する中で、どうもうまく説明のつかないところのものを、どうやって説明するかみたいなことで、ここに関心を持たれたみたいですね。しかし、それは尾高先生の中では多分傍系的な関心であって、主なものは、アメリカ流の産業社会学の成果の方向で、日本でどういう分析をするかということであったと思います。レジュメに執筆者のお名前を挙げましたが、そのうち尾高先生以外の３人の方々は恐らく尾高門下の第１世代と言っていいと思います。さらにこのうちの特に後ろの２人、中野　卓、松島静雄、このお２人の先生方は、まさにこの日本的なもの、これは中小企業に限りませんが、日本の経営における日本的なものの特質というテーマでずっと仕事をされていた方でございます。杉先生だけはちょっとそういう方向ではなくて、むしろ産業社会学一般を研究するというようなスタイルでしたけれども、しかし、この本の中では杉先生の書かれたもの

が一番日本的なものの特質、特に地域社会的な意味での日本的な特質について言及しています。ですから、後でもちょっと参照させていただこうと思っております。

この尾高門下のアメリカの産業社会学導入のひとつの大きな柱が、レジュメの「第１次調査」のところで挙げました東京大学社会学研究室プロジェクトというもので、「階級構造と社会移動」というのがそのタイトルです。ここでは階級という概念を使っておりますけれども、階層あるいは階層構造という言い方あるいは成層、階層が層を成すという意味での「成す層」、そういう言い方をする方がむしろ多いと思いますが、この研究が主要な仕事であったわけです。これは全国に、数は忘れましたけれども、大都市から農村まで地点を選んで、その地点で人々の階層序列がどういうふうになっているか、また、その人々がどういうふうに同じ地域で上昇・下降したり、あるいはほかの地域に移動したりして、そして日本全体でどんな上下の序列の社会構造が変動しているのか、といったことを明らかにする研究でありまして、この研究が第一世代から第二世代とずっと世代を引き継がれて現在にまで続けられております。その最新の成果が今度、東大出版会だと思いますが、この第３世代以降の人々によって３巻本の出版をすることになっております。

そういうプロジェクトの一部が、レジュメに挙げました「第１次調査」、つまりわれわれの行った川口市の「第１次調査」なんです。それに参加した４人の関心はちょっとそのメーンのプロジェクトとは違っていて、あるひとつの地域に入り込んで、そこでどういう経営、労働あるいは地域の構造が成り立っているか、こういうことを調べようというもので、それを研究プロジェクトの中の一部に組み入れていただいたわけです。本間康平さんは当時は社会学研究室の助手でして、あとの３人は大学院生でありました。１９６３年ですから私はマスターの２年だったと思いますが、その上に、後で研究内容を紹介します石川晃弘さんがいました。彼は後に中央大学で、同じ大学に勤めることになりました。この方は産業・労働社会学の専門です。それから、その上の元島邦夫さんは埼玉大学の教養部の教授であった方で、今はもう定年で引退されていますが、彼も産業・労働社会学です。そして、本間先生も、、尾高門下でやはり産業・労働を研究のひとつの柱としていた方です。そういう中で、私だけが産業・労働ではなくて、地域とか、政治とか、そういうことを研究していたんですが、参加の要望が聞き入れられまして、１９６３年から６４年のプロジェクトの一部となる調査に参加させていただいたわけです。

この４人の研究は文部省の科学研究費の補助金をもらって行われたものです。科研費のプロジェクトですから発表の義務がありまして、翌６５年の日本社会学会大会で報告をさせていただきました。そのときの報告集をどこかで見つけようと思ったんですが、そこまでやる時間的余裕がなくて、見つかっておりません。しかし報告集の方は非常に簡単な内容しか書いてありませんので、余り意味がないかと思います。むしろ、このときの調査を踏まえて書かれた唯一の論文が、石川晃弘さんがお書きになっ

た「鋳物業者の意識の研究」ということになります。近代化イデオロギーと鋳物業者の意識というように、近代化が進んでくる中で日本的な特質というものがどういうふうに変容し、あるいは温存されているんだろうかというような観点でこの論文は書かれておるわけです。これが「第１次調査」でございまして、「第２次調査」というのはいわばこの「第１次調査」から派生した研究でございます。

私が中央大学に奉職しましたのが１９６７年でございます。その後、レジュメに挙げてあります中西又三さん、この方はもともと中央大学の法学部出身の方でございますが、彼と、それから川崎嘉元さん、この方も東大のマスターを終えて、その後また、何の縁か、中央大学に奉職された方で、そういうつながりで、ひとつ「第１次調査」から派生した政治や行政の調査をやってみようではないかということになり、これも文部省の科学研究費の補助金をいただいて研究をさせていただきました。それがレジュメに挙げました２本の論文で、『法学新報』という中央大学法学部の紀要に書かれたもので、これがその抜き刷りです。私の著書『地方政治の社会学』に掲載されたのは、このうちの（一）の方です。（二）の方は入っておりません。（二）の方は、行政機構、行政組織の分析でございまして、これは主として中西さん、川崎さんがお書きになったところで、まだどこにも本になって発表されていないと思います。この紀要に掲載されたものだけだと思います。この「第二次調査」が行われたのは主として１９６９年から７０年で、その後７２年にまた追加の調査をやったように思います。

そうだとしますと、７２年ですから、今からおよそ３５年前ということで、今日３５年ぶりにお伺いしたような次第です。さっき会場に来る途中で金井先生、永井さんと、お話ししましたけれども、私、郷里が新潟県なので、しょっちゅうここを新幹線で通っています。その際見かけた風景と調査で訪問したときの風景とが重なり合っていますから、３５年ぶりといういい方が適切かどうか怪しいところがあるんですけれども、ひとまず３５年ぶりということにさせていただきたいと思います。そういうわけで、「第２次調査」の方も、後で内容をお話ししますが、やはり日本社会の近代化の中で日本的な特質がどういうふうに温存され変容しているか、といったことが主要な関心になっておりますので、そういう視点で見ますと、この３つの研究調査というのは、近代化の中で日本的なものの特質がどう温存、変容されてきたかということでは、ずっと一貫しているというふうに言えるわけです。そういうわけで、その視点に沿ってお話をしたいというふうに考えたわけです。

次に、レジュメの「２．高度成長期の川口―ひとつの転換期」でお話ししたいと思いますのは、この「第１次調査」、「第２次調査」の時点の位置づけということです。これはもうこの『市史』を材料にして整理させていただきましたけれども、この６０年代というのはやはりひとつの転換期、川口にとって、日本全体として高度経済成長期ですけれども、その中でひとつの転換期であったと言えるのではないかと思います。

まず産業の方で言いますと、鋳物業と機械業という、当時、私どもが川口に来たと

きも、この２つの産業が主産業になっておりましたが、『市史』を見ますと、６４年に、この年は世界的な大不況の年でありますけれども、そのあおりを食って鋳物業が大変なダメージを受けたと書かれています。そして、ダメージを受けた鋳物・鉄鋼に対して、機械工業はそれほどダメージを受けなくて、この２つの産業の差が開き始めているというふうな記述がございます。事業所数でも、それから生産高でも、従業員数でも、機械工業が鋳物業を上回り始めたという時期ではなかったかと思うんですね。

次に都市化といいますか、人口の変化という視点から見ますと、鋳物が不況であるにもかかわらず人口は大変増えているわけです。社会増ですから、ほかのところから移ってきた方々が急増しているということでございます。『市史』によりますと、１９６３年に２０万を超え、７０年には３０万に達したわけですから、２０万から３０万への移行の時期がちょうどこの調査の時期に当たるかと思います。この新しく増えた人々が新住民というふうに呼ばれていたわけですが、これについては、またその後、新しい変化が起こっているように伺っております。

ちょうどその中間の時点で、御存じのように、６６年川口市総合開発基本計画というのが発表されたわけで、この計画が当時の川口市をどういうふうに見据えて、どういう方向性を考えていたかということを見る上で、重要な材料であろうと思います。もちろん中身は、ここで触れるわけにいきませんけれども、その理念としてこういう理念を掲げていることが『市史』に載っております。ちょっと長いですが、口頭で申し上げます。「人間性に満ちた近代的な産業文化都市の形成」、こういう理念を掲げているわけですね。ここにも既に「近代的」という言葉が都市全体を包む重要な位置づけが与えられておりまして、われわれが近代化と鋳物業者とか、あるいは近代化の中で伝統産業、伝統的な都市行政、政治がどう変わっているかという視点を持ったのは、この基本計画の中でも裏づけられているわけです。ですから、キーポイントのひとつは、やはり「近代的」ということであろうと思うんですね。

あとひとつ、「人間性」「文化」というコンセプトが出てくるわけですね。これが何故出てきたかというのは、むしろ皆様方のほうがよく御存じだと思いますが、私の推測では、当時の市長さんの理念ではなかったかと思うんですね。大野さんが市長さんでしたけれども、大野さんはたしか教育畑が長い方で、その考え方がここに反映しているんではないかと推測をしているわけです。このことを大野さんに確かめたことはございませんが、そうしたコンセプトが「近代的」というキーワードとともに基本計画の中に組み込まれていることが大事かと思うんです。

また、同じ頃、正確には１年前の１９６５年になりますけれども、川口自民党が結成されているわけですね。御存じのように、これは自民党川口市支部ではなくて、川口自民党という独自の組織をつくられたわけです。それはいわば近代化という視点から見れば、逆流する問題なので、ここに経済や社会の方では近代化への転換ということが叫ばれていたにもかかわらず、政治の面では、それとのずれた動きというのが同

じ時期に起こっていたわけです。そういう意味で、旧いものを温存するという動きと、そこから近代化に向かって転換をしていくという動き、その両方がいわば拮抗し合っているといいますか、そういうことが私ども、川口市を調査した時期の全体的な特徴ではないかというふうに思います。

そこで、次にレジュメの「３．鋳物業者意見調査（第１次調査）」と「４．地域リーダー調査（第２次調査の一部）」を若干紹介させていただきます。まず「第１次調査」を踏まえたここにある論文は恐らく皆さん方、内容をごらんになるのは初めてであろうと思います。抜き刷りは後ほど差し上げたいと思いますが。石川論文でございます。調査の課題というのは、レジュメに書きましたように、政府及び大企業の立場からの近代化イデオロギーが中小企業者の意識に受容されたかどうかと、こういう課題設定で行われたヒアリング調査、アンケート調査です。

レジュメの２枚目に行きますけれども、調査が行われたのは１９６３年の７月ですから、暑い最中ですね。川口の日陰のない街を重い足を引きずりながら、それぞれの企業をお訪ねして、アンケート調査に御協力いただいたと、そういう調査でございます。川口市、川口の鋳物工業協同組合の組合員８５３名から等間隔で２分の１抽出で２４２名を対象にして実施して、回収サンプル１８０ですから、７４．４％の回収率ということで、非常に御協力をいただいたということかと思います。

その幾つかの結果を御紹介しておきます。資料の方の１枚目、１枚目から２枚目にかけてですが、まず第１表というのは、近代化イデオロギーを受容しているか、いないかということで、下に設問が書いてあります。近代化イデオロギーを受容しているというのは、「大企業と中小企業とは日本経済の両翼で互いにもちつもたれつの関係にあり、両者の利害は基本的には一致するのだから、互いに協力していくべきだ」という項目に丸をつけた方ですね。それから、非受容型というのは、「中小企業は大企業とは利害が必ずしも一致せず不利な立場にあるから、団結したり法律の保護を受けたり、何とか大企業と対等の立場に立つことが必要だ」これに丸をつけた方です。これが近代化イデオロギーの受容・非受容を知るのに適切な質問であるかというのは、今から考えるとちょっとあいまいだなという気はありますが、分析では非受容型の方が受容型よりも多かったという点が注目されます。企業規模でいいますと、３０人未満のところで平均よりもやや高い数値が示されておりますので、小規模の鋳物業者では近代化イデオロギーは余り受容されていないということになります。それから、年齢でいいますと、５０歳以上のところ、そして学歴でいいますと、中学歴、中卒の方々ですね。これは恐らく鋳物業にまさに社会移動で入ってこられた方々の年齢層あるいは学歴というのを反映しているのではないかというふうに思いますが、分析はそこまで立ち入っておりません。これが第１表です。

それから、第２表は、中小企業政策の受容・非受容ということで、下の設問を見ますと、受容型というのは「日本経済はこれから重要産業を重点に近代化が進められな

ければならない。これに寄与できるような中小企業を中心に近代化が進められるよう政策を立てるべきだ」というもので、近代化というキーワードを前面に出しているんですね。非受容型の設問はＡとＢに分けられて、Ａの方は「中小企業は大企業にくらべ経済的に不利な立場にあるから、中小企業分野を政策として保障し、保護、育成をはかるべきだ」、Ｂの方は「中小企業の当面している問題は、独占資本が中小企業を圧迫し収奪しているからだから、はば広く国民諸階層と手を結んで独占資本と闘わなければならない」となっています。結果は非受容型のＡというのが非常に高い比率を示しています。特に、企業規模でいいますと、受容の方が１０人未満のところで高いですね。これがちょっと特殊です。非受容Ａの方は４０歳未満、それから５０歳代、中卒以上というところになりますので、この非受容Ａの方は第１表の結果とかなり類似しているというふうなことが言えるかと思います。

続いて、第３表、もう一枚の資料の方ですが、これは中小企業の労使関係についての質問でございまして、受容型というのは「経営者と労働者はたがいに立場こそちがっても、両者の利害は結局において一致するものだから、協力してやっていけるものだ」というもの。非受容型のＡは「経営者と労働者とは利害がやはり相反しているから、両者が対立するのはやむをえない」、Ｂの方は「中小企業では経営者も労働者もない。皆んな立場も利害も同じだ」というものです。この設問では受容型の方が非受容よりも多いという結果が出ております。

これについては、この設問の方にも少し問題があって、これでいいかどうか、ちょっと問題があるんですが、むしろ非受容型のＢが１９．４％あり、これがむしろ川口の特質を示すものではないかということと、受容型の中にもそれに類似する意見が含まれている可能性があるというふうに思われるんです。というのは、この設問の後に自由回答様式で聞いている設問がありまして、そこでは「鋳物の労働者という場合、あなたはこれにどういう見方を持たなければならないと思いますか」というフリーな設問があるんですね。その結果がレジュメに記載した事例の数なんです。「家族の一員と同様」というのが２０事例、「仕事のよき協力者」、これもまたあいまいな答えなんですけれども、これが続いて15事例というふうに出ておりまして、これを考慮すると、受容型が確かに多いんですけれども、その中にこういう意見が含まれている可能性があるというふうに見れるわけです。

こういうふうに、ここでは３つの表だけにとどめましたけれども、それらを総合して言うと、近代化ということではすくい切れないような日本的特質というのか、あるいは川口的特質というのか、そういうものが当時、鋳物業者の中になおかなり温存されていたということが言えると思うんですね。ですから、最初の川口市の位置づけのように、近代化ということと日本的な特質ということが拮抗し合っていたという面がこれでも見てとれるのではないかというふうに思うわけです。

続いては、私が行った調査結果でありまして、これは先ほど言いましたように、第

２次調査の一部ということになります。後に行政の調査があります。これは中西さんや川崎さんが行っていただいたものですね。このレジュメの「仮説と方法」という、ところで言いたかったことは、地域のリーダーというのは、地域での上下の関係、つまり階級、階層的な社会関係に足場を持っていて、外からの企業や大企業の代理人ではないということです。そうなる場合もありますけれども、そうならない場合もあるわけで、そうならない場合も重視しなければならないというような仮説であるわけです。当時は、日本の政治の中心から全国に政府や大企業の意思が貫いていくみたいな議論が一方であったわけで、必ずしもそうじゃないだろうということが私の仮説であったわけです。そのために役職についてまず調べ始めたわけです。それが先ほど永井さんの方から配っていただいた一覧表、名前の入りかけている一覧表がありますが、これはむしろまとめであって、これの基礎になる相当膨大な役職調査があるわけです。これは政治的なリーダーについてだけでなく、経済的なリーダーの方もあるわけで、それを入れると２００人以上になります。先ほど、政治的リーダーの原簿を永井さんの方にお渡ししましたので、その方々の名前は全部わかります。どうぞ後でご覧ください。経済的リーダーの方は、まだ探索中でございますので、見つけましたら差し上げるということにしたいと思います。

資料の方の第４－２図、これは『地方政治の社会学』の第２章、こちらの方からとったものですが、これを見ますと、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｅ´とか、Ｄ´がありますが、そのほかに別ランクの大企業というのがあります。これらについては本文を読んでいただければわかりますが、Ａというのは当時の１０年間、調査が１９６９年から７０年頃ですから、６０年代に町会長やＰＴＡ連合会の理事をやった方々です。それだけしかやらなかった人がＡ、Ｂなんです。これらの方々が後でリーダーの政治的な階梯、階梯というのは、梯子、つまり上下の序列ですから、階梯の一番下のほうに位置するというわけです。Ｂの方は、商工会議所の議員で政治・行政の役職がない人、商工会議所の議員であっただけの人ですね。町内会長・ＰＴＡ連合会の理事あるいは商工会議所の議員、それだけしかやってない人がこの第１群に入っているわけです。Ｃの方は、商工会議所の議員と、町会長・ＰＴＡ連合会の理事、両方をやった人です。これが２３名ですね。これが第２群になります。それから、順番に行きますと、Ｄというのが商工会議所議員で政治・行政の役職経験者、つまり町内会長・ＰＴＡだけではなくて、市議会議員とか行政の役職とか、そういうことをやった方々です。これが第３群に入ります。Ｅというのは、政治的な有力者で、商工会議所の経験はない方々。商工会議所の経験はないんですけれども、政治的には重要な役割を果たした方々というので、このＥとＣを一緒にして第２群ということにしてあります。第１群というのは非常に数が多いので、これは全部の名簿はございません。その中から第２群に進むというのは、かなりハードルが高くて、大体１０人に１人の割合で第２群に進むと、こういう結果が出ました。

この中で、町内会長や商工会議所議員が手がかりになったというのはどこでもみられますが、ＰＴＡ連合会理事が手がかりになったというのは、この川口市のある意味では特徴かもしれません。このことは先ほどふれた大野さんの経歴と関係があるようで、ここ大事だよということを実はだれかから聞かされて調べたら、かなりうまくいったということです。

第３群のＤですけれども、ここでは鋳物業・機械業の仕事をされている方々が全体の半数、５２．２％を占めております。そういう意味では、あとでも触れますけれども、政治的な階段をずっと上って上へ行くと、やはり鋳物関係、機械関係の方々が多く出てくるということがわかりました。

さらに、４－３図というのがあります。これは川口で多分大分顰蹙を買った図ではないかと思いますが、これはあるインフォーマント、これは氏名は秘匿いたしますが、秘匿するどころじゃなくて、もう完全に忘れ去っておりますので、秘匿しようもないんですけれども、その方の意見を参考にして作成したものであります。もう１とか、１０とか、当地では全部おわかりだと思うんですね。１が大野さんで、１０が高石幸三郎さんであるわけです。２１の永瀬前市長も大野さんの下に位置づけられています。これらの方々は３群の中でも一番市政を左右していた方々であって、特権層なんていう言い方をいたしましたが、要するに市の中では大変影響力の高い方々であり、これは役職を探っていくだけではわからなくて、人脈という方法でこの図を作らせていただいたわけです。

これがこの調査の主要なねらいであったわけです。当時、政治社会学の方では、アメリカの研究の影響を受けて、少数のエリートが都市を支配をしているということをめぐる論争があり、では日本ではどうなんだ、少数のエリートが支配するのでは民主化がおくれるではないかというような問題意識がありまして、私はその影響を受けて、こういうことを日本でも調べてみようかということで、研究させていただいたものでございます。

次に、川口自民党、先ほど申し上げました川口独自の自民党組織についてでありますが、それと町会組織とはどうつながっているか、町会組織というのは政治的なこの階梯の一番下の重要な基盤であるとよく言われますけれども、それは一体川口の場合どうなっているんだろうかということに関心を持ったわけです。ここで本町１丁目について実は資料を得ることができて、それを示した表は『地方政治の社会学』に載せてありますけれども、かなり重要な役職をやはり自民党、本町１丁目支会かな、それの役職が握っているということが非常にきれいに出てきて、私自身びっくりしたわけです。ただ、この本町１丁目というのをどういうふうに位置づけるかで、このことを川口全体の中でどういう意味を持つかということを考えなくてはならないと思うんです。

先ほどふれました杉先生の論文の中では、この本町１丁目について「ここは商人的

性格を持つ町内だ」との記述があります。事実、私の本に載せた表の職業構成を見ますと、もちろん鋳物・機械の方もいますけれども、商人の方が非常に多いわけですね。そういう意味で、鋳物とか機械とかが川口に影響力を持っているという視点から見ると、ややずれるんですけれども、いずれにしても非常に伝統的な地域でございまして、旧川口の中心の地域にはある程度その考え方を押し広げてもいいのかなというふうに思っております。しかし、こういうふうに中心部をきちんと川口自民党が押さえているということが自民党の強さであったし、また川口の独自性であるということがここで見られて、私は大変感激をいたしました。

次に、「２つの政府への分離傾向」などとレジュメに書きましたが、これは第２群ではＣ、Ｅが中心なんですが、そこでは商工業のリーダーと政治的リーダーとの分離傾向というのがこの時期にあらわれ始めていたということです。しかし、先ほども言いましたように、第３群になると、この２つに影響力を持っている方々が頂点を占めているということで、「２つの政府」、川口の場合は、商工会議所と市役所、あるいは商工会議所というよりはその中の鋳物・機械関係者の方々、その「２つの政府」への分離傾向がまたこの最後には再統合されているというのが、この時期の特徴ではないかと思うんですね。そういう意味で、分離傾向というのは、ある面では近代化に伴う傾向でございますので、そういう影響を受けながら、頂点のところでは川口の特質というのがしっかりと残っていると考えたわけです。経済社会のレベルよりも、政治のところでしっかり残っているというのがこの時期の調査でわかったことであるわけです。

以上が、私どもが行った６０年代の研究調査でございまして、レジュメの２のところでお話ししたような高度成長期における川口市の特徴というのが大体裏書きされているというふうに見ていいのではないかと思います。

そこで、ずっと『鋳物の町』調査以来、日本的特質がどう温存、変容され、どう変わってきたかという視点でお話ししてきたんですが、そういうものを今日の時点でどう考えるかということが要望のひとつでございましたので、そのことについてちょっと気づいたことを申し上げて終わりにしたいと思います。その最初の手がかりは杉先生の論文であります。この中では川口には職人気質というのが非常に強いと、こういうことが言われているわけです。気質というのは、杉先生の定義では「社会・集団の成員の大多数によって共有されている生活様式および思考判断の様式」というものです。しかし、これは定義としてはいいんですけれども、実際に何をもって共有されていると考えるかというのは大変厄介な話で、いつも大体そこでつまずくような定義です。そういう気質、職人気質っていうのが川口にあるというわけです。ではそれの中身は何かということで、杉先生は、その基礎は「技術中心の生活態度、反面でその他の物質的欲望に対する恬淡さ」と書いています。ここで「恬淡さ」というのは、お金はもらっても、それを全部飲んじゃえというような、そういう気質のことを指しているわけですね。また「親分子分組織における気質との結合」とか、「人間関係を支配す

る義理と人情」とも書いています。しかし、義理と人情とは何かなどという議論をやりだすと、またとめどもなくなるわけで、実際に分析するのは大変難しい話だと思います。

それを踏まえて、石川論文のところではどんなことが書かれているかというと、温存されているというか、縮小されながらも温存されていく、つまり、一方で近代化の影響というものを受けて変容していくと書かれています。私のところも、大ざっぱに言えば、そういう様相を示しているということだったと思います。これらを踏まえて、今日の川口市、私は３５年ぶりですから、よく存じませんけれども、いただいた資料とか、お聞きした話とかということを踏まえて言いますと、レジュメの最後にあげたようなことがヒントにならないかなというふうに思っているわけです。

ひとつは、東京圏にもう組み込まれてしまった、そこに埋没しているということです。「組み込まれてしまった」というのは、社会増を含みます。そしてその主要な要因は新しく移住してきた市民と外国人の増加ということです。そのことによって、３つの文化・生活様式というものが川口市の中にあるのではないかと考えます。それがレジュメのその次の括弧の中にある［キューポラ（cupola）の里＋市民イニシアティブ＋異文化＝３つのストーリーの共存から共成・共創へ］ということです。ここで「キューポラの里」なんていう勝手な名前をつけましたけれども、これがどういう意味を持つかというと、キューポラ＝クーポラ（cupola）というのは丸天井、要するに教会とかモスクの丸い天井がクーポラなんですね。ですから、これはひょっとすると、異文化交流のひとつの橋渡しになるんじゃないか、みたいなことをちょっと考えまして、わざとキューポラ、永井さんのほうからものづくりのまちということもひとつ川口の特徴であると伺いましたけれども、あえてキューポラ＝クーポラという見方をしてみたらどうかというのがひとつです。キューポラの伝統は変容しており、政治的、経済的な要素を持って温存されているようでありますが、全体としてわれわれが調査した時点から比べても縮小して、記憶の中に多く残されているところではないかと思います。

それから、２番目が新しく移住してこられた方々が中心になるのではないかと思い、あえて市民イニシアティブという言い方をしてみたわけです。ここではＮＰＯ、ＮＧＯの活動を念頭に置いておりますが、これらは異文化との橋渡しだけでなく、同時に、旧来からの住民との間の橋渡しもできる、そういう生活様式・文化ではないかなと思います。

最後は外国人の文化ということでありますが、それを今、どういうふうに川口市の中で位置付けられているか、私よく存じませんけれども、それがキューポラの記憶を媒介して川口の文化・生活様式とどこかで接点を持つということも考えてもいいのではないかと思います。

そう考えていきますと、川口市には３つの物語があるわけで、この３つの物語が現

在どうなっているかわかりませんが、少なくとも共存していると思うんですね。それをどう撚り合わせていくかということが共成とか、共創というコンセプトで目指すところであって、そこを目指すようなキーワードというのが自治基本条例の中に表現されると、３つの物語のつながりが出てくるのではないかというふうに思うわけです。

最初の方で、われわれが調査した時代はひとつの転換点であったと言いましたが、その後、何度転換点があったのか、私にはもうわかりませんけれども、少なくとも今ももうひとつの転換点であって、その３つの物語が撚り合わされていく方向が見えてくるような、そういう転換点と考えたらいかがでしょうかというのが私の感想でございまして、以上で私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○金井部会長

どうもありがとうございました。

まだ時間若干ありますので、皆さんの方からぜひここは、というご質問をいただければと思います。

○林委員

川口を調査くださったときに、どうして川口を調査対象に選ぼうとそもそも当初なさったのか、そのあたりなどを伺えませんか。

○古城氏

それは尾高先生たちが中小企業における日本的なものの特質の探求の対象として選ばれたわけで、その１０年後の変化を追ってみよう、２０年後の変化を追ってみようと考えたわけです。私どもが選んだというよりも、先輩たちの研究を引き継いでみようというのが動機です。しかし考えてみれば、尾高先生たちが近代化している日本の中で日本的なものの特質を東京近辺でよく残している中小企業地域ということで選んだのであれば、それはさほど不思議はないと私は思います。

○林委員

川口という町が近代化していく日本の中で日本的なものの特質を東京近辺でよく残している中小企業地域ということですか。

○古城氏

はい。中小企業というところにひとつ焦点があったと思います。農村であれば、またいろんなところがあり得るかと思いますけれども。

○金井部会長

川口の一つの特徴というのは、自民党が非常に強い組織を市町村レベルで持っているということだと思うんですね。普通の市町村の保守系というのは無所属を名乗るというのが、むしろそれの方が日本的だと言われています。ヨーロッパ諸国ですと末端まで政党化が完全に進行する、アメリカは必ずしも民主党・共和党になりませんけれども、党組織はかなり広くある、多くの人が党員になりますから。そういう意味では、日本はどちらかというと保守系無所属と町内会がくっつくというのが多いんですけれども、川口はどちらかというと自民党というある意味、政党という近代的なものががっちりあって、しかもそれが川口自民党としてある意味で全国政党ではなくて、独自の組織を持っていたということが非常におもしろいなと私は思っていたんです。先生からごらんになられて、川口自民党的なるものが保守系無所属じゃなくて自民党を名乗っていた。先生の本ですと、ある意味では大野マシンといいますか、大野軍団とも言える存在でもあるわけですけれども、それは近代的な観点からいくとどういうふうに当時ごらんになられていたんですか。

○古城氏

最初からそれを考えて調査に入ったわけではないんです。先ほど林さんにお答えしたように、１０年後、２０年後の変化を追っかけていって、川口に来てみたらそうだったということで、それは確かに金井さんのおっしゃるように非常に特殊というか、日本のほかのところにないところがあって、なぜそうなったかというのは僕よりもむしろ、この『市史』の中にその政争のいきさつが詳しく書いてありますので、それの方がいいと思いますけれども、何なんでしょうね、いや、そこは僕は余り詰めて考えてないんです、どうして川口自民党なるものが自民党支部ではなくて独特なものとして結成されたかと、当時のやっぱり有力者の人間関係、それから埼玉県の中での川口市の位置みたいなことがあって、当時の指導者たちがそう考えて決断したんではないかなと推測しますけども、それは議員さん方のほうからいかがでしょうか。

○金井部会長

特に、一般に党を名乗るというのを嫌がるというのが、むしろ日本的な特性だと思うんですけど、川口の場合は町内会に入ると自民党をある意味名乗るということを決断することになるわけですよね。自民党だと言っちゃうわけですよね。かなり大きなことで、普通の日本人の感覚からいうとかなり間口を狭くする、まさに敷居が高いようなイメージを持つんですけども。

○古城氏

僕は調べてないんですけれども、町会、全市そうですか。

○金井部会長

自民党と言ってしまうとやっぱり引くんですよね、保守系であるということには入るんですけれども。

○古城氏

川口市全市域で自民党というふうに言うかどうか。それはもちろん旧い地域だったら、恐らくそういうことに何ら躊躇もなく名乗るということは僕は理解できるんですが、全市域そうなっているとはちょっと思えないんですよ。

○金井部会長

なるほど。中心街だけは川口自民党で、あとは無所属なんですね。

○池田委員

いや、そうじゃないですね。もう明らかに私なんかもそうですけど、市内を２０地区に分けてあるんですよ。そこに２０連合支会という自民党の下部組織がありまして、そこから推薦をいただけないと保守系の議員というか、自民党を名乗れませんので。自民党の公認もらわない限りはちょっと後援会だけでは戦えないというのが、私ども川口の特徴ですよね。２０連合支会から大体１人ずつ出てくるんです。ということは、逆に競合しないように、１連合支会から２人保守系が出ないように競争力をつけるという意味もあって、時たま大きな地区、保守系が２人出てきますと、片方は公認だけど片方は推薦だとか、ちょっとハンデをつけるというところがありますね。

恐らく私が１７か１８歳のときに大野さんが県知事になったんですけど、そのときにも私どもは右も左もわからないけど、自民党の運動員として車を運転しなさいと地域から言われましたので、何も考えなくとりあえず行きました。だから、いろんな地方に視察なんかに行くと、一党一会派というのは、全国に川口だけなのかなと思います。風によっては非常に自民党と名乗るときに逆風になることが非常にあるわけですね。そうすると、小さくポスターに自民党と書いたりして。書かないと当選した後にいろいろありますので、そういう工夫はしたりですね。今回、自民党の候補なんかでも書かなくて後で問題になった議員もおられましたけれども、やっぱり特異なやり方だと思います。

ただ、私なんかが今思っているのは、なかなか自民党公認候補というのは間口を狭くしているんで、いわゆる一般の保守系の方とか、もっと言えば無所属の方を取り込むにはやや厳しい時代になってきたのかなと思いますね。

○古城氏

候補者の調整機能を持っているわけですね。

○池田委員

持ってますね。

○古城氏

それが大きいんじゃないですかね。

○池田委員

そうですね。

○古城氏

そうすると、そういうことはほかのところでもあるわけですけれども、それが政党を名乗ってやるか否かというところが違うわけですね。

○池田委員

そうですね。だから、例えばお隣の鳩ケ谷市、草加市では、みんな保守系だけど無所属ですよね。

○古城氏

特に、川口が調整機能が強いというわけではないんでしょう。

○池田委員

我が党では、まずそこの地区の推薦を受けないと、無所属で出ると、今まで自民党の組織、これイコール町会組織的なところがあるんですよ。町会の役員さんがほとんど自民党の系列ですので、それもなかなか特殊なのかなというふうに思っているんですけど。

○古城氏

私がさっき本町１丁目は特殊なんじゃないか、旧地域しか当てはまらないんじゃないかというのは間違いで、全市に当てはまるんですか。

○池田委員

そこから発生しているんですよね。いわゆる先生がおっしゃる、根っこの本町地区から波及して、そのような組織につくり上げたのかなというふうに思うんです。だから、本来、戸塚だとか新郷なんかは、そういうことは余りなかったと思うんですが、中央からそういうことで組織づくりをさせたとか、そういう形なのかなと思ってるんですけど。

○古城氏

確かに、私がイタリアに行って実態調査を２年ほどやったんですが、政党は末端まで市町村は全部政党ですからね、どこが違うんだと言われると、もうほとんど紙一重みたいなところで違っているんじゃないですかね。何だろう。

○林委員

本町１丁目でここから川口自民党のスタイルが始まったというお話がありましたけど、どうして本町１丁目から始まったんでしょうか。

○古城氏

３５年前の記憶ではわかりません。どうしてかと言われると。

○池田委員

やっぱり鋳物屋さんの社長というのは、そういう表裏一体のような、私なんかはずっと後輩ですけど、昔は自民党というとイコール鋳物屋さんの社長というような感じがしました。最近、いろんなサービス業の人が出たりしてますけど、３０年、４０年前はもう、いわゆる製造業イコール鋳物業プラスその下請関連、機械だとか木型だとか、それ以外はちょっと自民党を名乗るというのは難しかったということだと思います。もうひとつは、お金が非常にかかった。これは長も全部同じでしょうけれども、そういう点では特別にそういうところが強かったかなと思います。

先生から見て、ひとつの町で同じ職業の人が衆参国会議員であり、県会議員であり市長であり市会議員が多数占めている都市というのは、いろんなところに行かれるでしょうけどありませんでしょうね。

○古城氏

そうですね。

○池田委員

筑豊だとか小樽なんか、ニシン御殿もあるけど、ここまで鮮明ではないですからね。その対局にいる金子先生なんか、長くそういうのをよくご覧になっているから。

何年か前に私なんか、党名を消そうという話があったんですよ、自民党を名乗らないで出たいという話をしたら、えらく叱られましたね。そんなの出ていって何ができるんだと。一人っ子で何できるって、そういう圧力がかかりましたもんね。

○神尾委員

こちら先生の方から先にいただいたプリントを見させていただきまして、川口市内

の権力構造、地域組織と権力者層、町会が権力者の選出母体になっているというこの部分なんですけれども、私が今住んでいる町は、自分の地域からは市議会議員とか余り出てないことはないんですけども、現在は余りいないんですね。いないからこそどうなのかっていうと、自分の地域担当で来てくれる方だとか、それから町会長レベル、そして町会連合会といったものがもう一致団結で忠誠を誓っている形に近いですね。そして、さらに飛び越えて、衆議院議員さんがエリアの中にいると、もうまさに忠誠を誓うという感じで、もう何があろうともとそういうところがあります。ですから、今そういうのを見て、自分なんかの感覚からいくと、随分閉塞的な活動だなと見えたりもいたしました。バックアップ体制が非常に閉塞的で、高齢化しているところにいろんな限界もあるし、フットワークの悪さみたいなものとか、そこで頑張ろうとしている議員さんよりも、むしろ後援会のお偉いさんの方がその人を仕切ってしまっていて、自由に活動させてあげていないような縛りもまた見えたりもして、不思議なところだなと思って見てました。それで、こちらを読んでなるほどというのが何となくわかったりもいたしました。

ですから、むしろ本町１丁目のような開発がどんどん進んで、そこの町の中にゼネコン関係のお金なんかがどんと入っているところは意識も近代化というか、今風になってきつつある中で、例えば、これは電信柱一つとってもそうなんですけど、本町あたり既に電信柱がないんですよ、空が非常に広いんですね、電線がないから。しかし、いまだそうした市政の日の目が余り当たらない、ちょっと道路を隔てて奥に行きますと、もう電線だらけですよね、空が。もう電線だらけで電信柱だらけで。そういうところから見ても、見上げたときに電線がない方が気持ちいいのはあるわけですが、またプロパンとかそういうものもそうかもしれません、下水道とかそういうのもそうかもしれません。本町から離れれば離れるほど整備がおくれていて、しかも忠誠心は強いというような、そんな感じに何となく見れます。

でも、その中ででも変化は少しずつでも起きつつあるんじゃないかなと。それはどこから出ていくかわからないけれども、何かずっと同じだったものの、その一方にあるものの中から何か出てくるものがあるんじゃないかな、出てくるものはどんなものだろうな、なんていうふうに今後のことを見ていたりします。

○古城氏

私、３５年前の昔話かと思っていたんですけど、逆の話を聞かさせていただきました。

○神尾委員

いいえ、そのまま受け継がれていますね。

○池田委員

皆さん金属疲労起こしているんですね。

○神尾委員

そうなんです。どうしてもいろんな書類を持っている方、地域の重要な施設のかぎを持っている方、そういった方が５０代以上だったりするんですけど、その方々が動かないと防犯も防災もできない。けれども、その方々はそれこそ川口気質をいまだに持っているので、町会の寄り合いがそのまま、もうへろへろになるまで飲み歩くといった、そういう偉い人が威張るための飲み会には３０代、４０代のサラリーマンは参加したがらないのが自然でして、行けば行ったでもう私なんぞはもういじくられまくるというか、疲れますけれども、行かねばしようがないと思ったときには行きますが、町会のお偉いさんたちとお話しするときには、エネルギーも要るし気も使うし、お金は使わないで済むけれどみたいな、そんな感じですね。でも、ここに書いてあることは３０年前と比べて、高齢化はしているけれども、そのまんまの姿で現在も脈々と受け継がれ、中央から離れていればいるほどの忠誠心を感じます。

○古城氏

そうすると、私の最後の３つのストーリーは、もうちょっと逆戻りさせて考えないといけないですね。

○林委員

現在、新住民の人たちが増えてきています。ですから、先生がこの３つのストーリーを推測されたのは、やはり当たっている面もあると思います。

○古城氏

当たっている面もありますか。でも余り強調したらいけないですね。

○林委員

温存されている面もありましょうし、新しい住民の方々も多くなっています。今後、そういういろんな市民の方がまた新たな感覚で川口市内で動いてくることでしょう。ですから、先生が最後に結論として出されたことが当たっている面もあるし、これからどんな動きになっていくのかなというのはあるかと思います。私は新住民の一人ですので、その点が気になるところです。

○古城氏

ちょっと私わからないんですけども、川口というのは合併の話というのはないんで

すか。

○池田委員

ありました。

○古城氏

どこと合併するんですか。

○池田委員

最初は、蕨、鳩ヶ谷、戸田、草加の県南５市でした。

○古城氏

断固拒否でしょう。

○池田委員

いえいえ、それで一生懸命やってきて、４市になって３市になって壊れたんです。

○古城氏

壊れたんですか。合併とかそういうことが起こると、これってすぐ変わる可能性があるんですね。

○池田委員

そうですね。

○古城氏

今までの川口と違うところが入ってくるから。

○池田委員

全然違う人が、いわゆる違う血が入りますからね。今、その違う血というのがどちらかというと新しい人、いわゆるマンションに入っている方が逆にいうと、私どもから見ると、新しい血でよくわからないというか、私どもに対して一番難敵というか保守的というか。この部会にも市内で一番高さがあるマンションのエルザタワーの理事長さんをお招きしたんですけど、やっぱり全然地域や行政に無関心というか、単独で自分たちのまちづくりをするような感じのお話しいただいて唖然としたんですけど。自分たちの利害関係でマイナスになったときにはものすごく団結して、やはり行政に打って出る。だけど、それが解決すると、またぐっと自分たちの殻に閉じこもるとい

う傾向が強いですね。

○神尾委員

そうですね。

○池田委員

否応なしにやっぱり自民党というのは、こういう歴史も、やはり今、合併じゃないけど合併に準ずる新しい市民の方がふえてくると、否応なしに変わらざるを得ないようになるかなと思いますけど。

○野村総研

先生が調査されたときも人口が随分４０万でしたか、３０万にふえた時期だとおっしゃっていて、旧住民と新住民という言い方は多分その当時もあったんですよね。今もそのマンションを初めたくさんそういう話があるんですが、その当時の話として、新住民といいますか、新しく川口に来た住民の方の政治の影響力というか、そういった話というのは余りやはりなかったというか、大きく、先生の分析では多分町会はじめ旧来からの影響力がやっぱり強かったという分析だと理解したんですが。

○古城氏

政治的には、それは投票結果が変化してくるというところしか見れなかったんですね。お話しした通り、リーダーの側面で、しかもだんだん影響力のあるリーダーへと絞っていくと全然そのあたりの影響力は反映されない仕組みだったですね。しかし、投票行動を見ると、非常に分散化してくる傾向はあったし、今も多分そうではないかと思うんですが、いかがですかね、そういう最近のデータ見ていませんけれど。

○池田委員

いっとき先生がおっしゃったように川口市の人口がふえたというのは、宅地化になって戸建てがふえたんですよね。

ですから、比較的そこに腰を落ち着けて子供を育てていくと。この１０年というのは、ああいう大きなマンションで、一時は分譲だったんですけど賃貸が結構多かったときがあるわけですね。それが恐らく４０万か４５万ぐらいのときだと思うんですが、やはりそうなってくると今、基本的には住んでいるだけで、何ら干渉もなくて経済的にも都内、教育も都内ということになってくると、今、何十万弱いると思うんですが、そういう人たちの意識が我々と乖離してきている。今、神尾さんが言ったように、もともといる人が何かよくわからない年配者であり権力志向だし、排他的というか、自分たちが高齢者になって早く若い人たちを入れなくちゃならないんだけど、どっちか

というと余り得体の知れない人、氏素性のわからない人は入れるとかき回されちゃうとか、斬新なアイデア持ってますし、そういう形では気持ち的には入ってほしいんだけど、入ってもらうと何か心配だというのは私の近辺でもありますよね。声をかけたいんだけど、かけてやると、ある程度教育レベルとかそういう水準が高いもんですからやり込められちゃうというか、そういうこともやっぱり気にしてる方もいますね。

○古城氏

市政の方向としては、どこをターゲットにして考えているんでしょうね。多分、議会の中には沢山旧い市政とかがあるけど、市民の方ではそういう人がいっぱいいて、その人たちは多分政治には余りかかわってなくて、ほかのことに関心を持っている。その場合、市政としてはどこにターゲットを置いてまとめ上げていくのかというのはどうなっているんでしょうか。

○池田委員

私、まだ、駆け出しですが、まず投票率が年々下がってきていると、私ども保守系の議員がやっぱり少なくなっている。激戦を勝ち抜けなくなってきたんです。というのは、やはりこれからの市の方向性の近い将来、今のままでは難しくなってくるのかなというように私自身思っているんです。

○金井部会長

それは恐らく私が見ている限りは、市長は両方に足を置きたいとどうも思っているらしいんですよね、そうしないと自分が選挙で当選しないと。だけれども、市議会は先生のおっしゃるとおり、議員の両先生の前で言うのもなんですが、古い勢力が多い。それから、恐らく役所の職員もやはり古い旧態の方になれ親しんでいる人が多分多いと思うんですよね。実は、多分自治基本条例検討委員会の名簿が市長のバランス感覚をちょうど反映したような形になっている。実は総合計画の審議会というのはむしろ旧態依然とした形に乗ってつくっている。恐らく市長は両にらみで綱渡りをしたいと思っているんですが、両方にいい顔すると落ちるということもありますから、両方から嫌われるという可能性もあって、多分そこが胸突き八丁を続けているんじゃないかなと私は思っていますけどね。旧勢力も強いですから、簡単に風に乗ってという市長では当選しない。だから、ばりばりの自民党の人なんですけどね。だけれども、ボランティアとかいって何か新しい市民のような行動もするという、非常におもしろい。だから、大野さんのように本当におれが自民党だという感じではどうもなさそうですね。

○池田委員

永瀬前市長も自民党です。

○金井部会長

そうですね。だから、永瀬前市長まで自民党公認候補で・・・。

○池田委員

岡村市長が無所属で・・・。

○金子委員

統計的に調べているわけじゃないけど、今、いろいろ話しを聞きながら、先生が調べたころまでは大体地域の産業に仮に新しく川口市外から来た人であっても、川口市内の産業に勤めるというか、そういう関係があったんじゃないかと。当時だって常に社会増というのはあるわけですから、現在の変化というのは、ここ１５年かもうちょっと前からかもしれませんけど。そのころの変化からは東京の開発とかいろんなことで東京に職を求めていた人が居住の場所を川口に求めると。荒川を越えると比較的安いという地理的条件で、東京に職場がある人が川口に越してくると、こういう関係があるので、結局、川口在住だけど東京都民と、そういう傾向があって、それが町会を通じて池田さんの話を、中にいなくても大体合っているなと思って聞いていたんですが、そういうことにも要するに住まいの場所で生活するというよりも、東京で生活すると、こういうことがあって、最近は今度は企業も動くから、居住地も変化するということで、川口の出入りが社会増減がプラスマイナスでやると２万５千人ぐらい移動すると。この変化は、いわゆる２万５千人で同じ人じゃない場合もあるから、わかりやすく言うと、川口の人口の１割が毎年入れかわっているという、この社会構造、川口だけじゃなくて全体からくるいろんな社会構造の変化が位置づけているんだろうなと思いました。先生が調べたころの異文化というか、そういうのは私の感覚からいくと、当時は朝鮮の人、国名でいえば川口は非常に多かったと思います。１０年ぐらい前にいろんな人が入ってきて、ここのところ落ち着いたりしているけど、その橋渡しのことが産文センターなんかでも研修生というのを呼んで、その話を聞いて飛び越えてきたりなんかしている、そういう状況があったりするわけです。

そんないろんな経済的な構造といろんなかかわりの中で、人の生活点がどこにあるかとかという、いろんな形の中で進化してきて、さらに今度は産業の中でも第３次産業、要するに地元に定着していた小売店じゃなくて、大型店がかなりできて、それの売り上げがはるかに小売店を凌駕している。そこに日曜、祭日、車でジャスコだなんだとかいうようなところに行くような、そういうことですから、全く地域的なつながりがなくて生活できると。それが生活かと言われるといろんな意見があるけど、人に

よってはそれは生活じゃなくて生存だなんて言う人もいるけれど、そういう社会、首都圏の中のねぐらになっているところの、川口だけじゃない現象なんだろうなというふうに思ったりしていますけど。

先生が書かれた本は、私が当選して間もないころ、ちょうど畑県政ができて、誕生する前後の関係ですからね、そういうときに「これ間違ってない」という話でね、最初にいろんな勉強したものでかなり頭の中に残っているんですが、そのときからいろんな人のつながりは大きくやっぱり変わっているなと思います。今の時代でも新しい人がいるということでも、その新しい人がいるというのは、川口に直接就職を求めて来ているんじゃないんですね。そういう違いがかなりあるだろうということは、戸建ての話がありましたが、戸建ての場合はなかなか処分して次に引っ越すということはないけど、マンションの場合はすべてそういう推しはかってはいけないけれど、一時２０年ぐらい前のときには、一たん買っておいて、それを処分すれば次のところに行っておつりがくるというようなことが言われたことがあるから、そういういろんな歴史的背景が人のつながり、経済のつながり、いろんなことがあるのかなというようなことを思いながら、東京圏の埋没と３つの文化という話、問題提起されていますが、これをどういうふうに理解してどうやって現状認識していくのかということについては、いろんなことを思いながら埋没しないよう、私自身の頭も埋没させないようにどう勉強しようかなと思っております。

○神尾委員

やはり埋没しないためには、だれかが引き上げなきゃいけないと思うんですよね。自分は引っ張られていきたい市民の側にいますけれども、住民層も変わってきました。職業の構成も変わっていく。その中で変わらないものもあるという非常に転換期、過渡期の中で、東京圏に埋没するだけで終わらない、そういう川口の元気をつくるには、まさにこの時代、この時代だからこそつくろうとしている自治基本条例、ここに１群、２群、３群、いろんなタイプの立場のリーダーの方々がありますけれども、古城先生が今までの私たちのいろんな話とかをお聞きになられて、どのようなタイプのリーダーが今後の川口には求められるというか、必要と思われますか。

○古城氏

その前に、今おっしゃられた埋没とか幾つかのことについて感想を申し上げたいんですが、僕の調査した時点でも就業人口の４０％が市外への通勤で、そのうちの８割が東京都への通勤者という結果がでています。これがどう変動したかということは、今の問題を考える上でひとつ手がかりになると思いますけれども、その後の変化をフォローされることが必要かと思うんです。

それから、金子先生のおっしゃった異文化というのは、私の場合は朝鮮の方々のこ

とを考えているだけではないんです。今、私、実態は知らないんですけども、事実中央大学の大学院生でアラブの方ですけども、川口に住んで通っていた人がいましたから、もっといろんな人たちが入ってきていると思うんで、その辺の実態については余り私はその程度の知識しかないんですが、余り話題にならなかったのでもうちょっと重視される必要があるのではないかという気がします。

○神尾委員

外国人が埼玉県で一番多いんじゃなかったですか。

○林委員

そうです。川口らしさでは外国の人たちの存在が大きいのではないでしょうか。私が数的にも、それから人材的にも非常にすぐれた人たちがいっぱいいらっしゃるんじゃないかということを川口らしさの一つ、川口の国際性として以前に御提案しました。今、神尾さんもおっしゃったように、川口市は埼玉県の中でも一番の外国籍市民の多く住む地域になっております。ですから、その意味でも韓国籍、朝鮮籍の方々だけではなく多様な外国籍の市民の方が川口にお住まいなのです。

○金子委員

現在はそうですね。私がさっき言ったのは、昭和３０何年ごろはそういうところで大体位置づいているんじゃないかと、そのころは。現在は、今言ったように２万人前後登録しているんですよね。

○林委員

実は、３月２３日の日曜日にあるイベントが川口で行われました。これはまちづくりや環境系の市民ボランティアの人たち、それからアーティストさんたちも一緒になって行った３９アートというイベントでした。川口の全域で各所の画廊やギャラリー、それから公民館などで写真展はじめ古い物から新しい物までアートで見られるというまちおこしの企画を仕掛けました。例えば、今、話題になっている本一商店街や川口発祥と言われる金山町で、見学ツアーを行いました。これらの試みには市民の人たち、本一商店街もかかわっておいでです。川口神社で川口の鋳物製のおもちゃであるベーゴマを使ってベーゴマ大会もやりました。さらに、田中徳兵衛邸と並んで国の文化財として登録されており、田中徳兵衛邸よりももっと早くに市が取得されたものに、今の母子福祉センター、旧鍋平邸があります。それは鋳物商のお住まいであったところを市が取得してくださったんです。その旧鍋平邸で古い物を残し、現代にどう活かしていくかというシンポジウムを行いました。それこそ和室で座布団に座り、車座になって、もうざっくばらんな雰囲気で行われました。文京区からゲストを呼びましたが、

この方はナショナルトラストの手法でまちおこしをしている人です。その方に講演会をしてもらい、その後、永瀬前市長さん、世界的なアーティストの方やほかの４人の方も加わり、パネリストになって座談会を行いました。そこで、川口のこれからのことが語られ、このシンポジウムが３９アートの流れの中で行われたというわけです。そういうイベントが３月２３日に行われて、私もお手伝い、仕掛け人や協力者の一人としてかかわっておりました。旧鍋平邸でアーティストがパフォーマンスを２階の方から行うということもなされました。先ほどの川口神社でのベーゴマ大会では、日本人の大人や子供たちの中に、たまたま韓国籍の三世、四世の若い世代が混じっていたんです。日韓の枠を超えて自然体で一緒になってベーゴマ大会をやっているわけですね。ですから、川口神社の境内が何か不思議な空間になって、まさにちょうど古城先生の結論にあるようなことが３月２３日に一つのイベントの中で具現化されているような気がしました。それで、少し御紹介した次第です。

○古城氏

今おっしゃったように、やっぱり歴史的な保存地区というのを設定するというのは、多分川口にとっては意味があることじゃないでしょうかね。「キューポラの里」なんて言いましたけども、そういう意味でイベントは、今そういう人集めに非常に有効な手段ですから、川口はそういう意味ではほかのところにない資産を持っているわけですよね。それは大いに利用されて、そういうところに参加する方々がどういうふうに市の政治にも参加するかというのが、神尾さんの言われたことに対する僕のひとつの答えでもあります。ＮＰＯとかＮＧＯというのは、もう紋切り型でかなり組織立ってますから、それだけに依存しているのではやはり不十分だと思うんですね。そういう意味では、いろんなボランティアの方が出てきますから、今の日本の社会というのは、それを引っ張り出すのはやっぱりイベント開催力だと思うんですね。これはだれが持っているんでしょうかね、開催力を、そこはちょっと工夫をしないといかんと思うのですが、うまくいけばそこから育ってくるような形というのが、うまく歴史的保存地区が「キューポラの里」とつながれば３つをつなぐ力になるんじゃないかと思うんですけどね。

それからもうひとつ、それに関連して、僕の２つの政府というのを今はちょっと訂正しなければいけないようですね、僕は商工会議所と市役所ということを言ったんだけども、川口自民党と市役所というふうに言いかえないといけないみたいですね。商工会議所も力あるんでしょうけれども、むしろ今の話聞いていると、川口自民党という政府がもうひとつあって、事実上の市役所のシナリオを何か動かしているみたいな、半分動かしているみたいな感じを受けたんですが。いや、不正確ですか、商工会議所の方がまだいいですか。

○池田委員

そこまで力がなくなってきたんだね。

○古城氏

ですから、いずれ２つの政府といっても、今のまま延長していけば、それは先ほど池田さんがおっしゃったように金属疲労を起こすわけで、それはそれなりに僕はさっきの歴史的保存地区だっていろんな人たちいますから、それはそれでその中から川口自民党の第４代か第５代になっていく人もいるわけですからね。いつまでも金属疲労で続くかどうかわかりませんけども、その２つの政府をどっちで考えたらいいのかなというのはちょっと御検討いただきたいと思いますが。

２つの違った物語がぶつかり合っていますと、これは安定していませんので、そこをどういうふうに共存をしていくかということが大事なことではないかと思うので、さっきの３つの文化・生活様式からどういうリーダーが育ってきて、そこを調整していくようなリーダーが出てくるかということにひとつの課題があるのかなという感じを持ちました。

○金井部会長

予定した時間を大分超過してしまったんですが、ほかにもうよろしいですか、最後に。

○林委員

３つのストーリーの共存から共成、共創へというふうになっておりますね。共存、共生というのはわかるんですけれども、共生に「成」の文字を使われていますが、これはどんな思いを込めて、どんな意味で使っていらっしゃるのでしょうか。

○古城氏

それはもう共存しているのが交流をするということですよ、共成というのは。そこからまた新しいものが生み出されてくる場合が共創で、そのためにはまずは協力をし合うということです。

だから、ばらばらに横並びのものが組み合わさっていく、共存だとまだ並んでいるイメージで、もちろん全然関係ないということはないんですけども、そこから構成されていく、別なものに。そこから何か新しいものができてくる場合は共創です。ちょっとごろ合わせみたいなことを言ってますけど。

○金井部会長

それでは、長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。